

高校2年の夏は暇である。

ゴドちゃん@小説頑張る

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので  
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を  
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

少年達は何をやるのか……。

高校生達は何をするのか……。

高校生の日常系コメディ?ここに開幕!!

# 目 次

プロローグ & 第1話

1

え？ 2話目からこんな調子で大丈夫なのか？

よし、あいつの家に行こう。

最終奥義!!

27 14 7



# プロローグ & 第1話

太陽が眩しく、蒸し蒸しとした陽気のある日。そこには前髪を上で結んでいて  
ああああああ!!と奇声を発しているある少年がいた……。

「あああああ!!こんのつ！クソザコがあああ!!お前どんだけ漁夫れば気が済むんだよ  
!!」

画面を見つめ、手にはコントローラーを握りしめていた。だが、そのコントローラー  
は今にも空中をまいそなくらいにぶんぶんと振り回されている……。

「なんなんだよコイツは！人が8割削った敵を横から狙撃とかマジでふざけんじやねえ  
ぞ！しかも俺まで巻き込んで撃ちやがって!!」その少年はどうやらps4（PlayStation 4）  
のオンライン専用のロボットゲームをプレイしているらしい。まあ、俺な  
んだが…………。

エピソード1『やることが決まらねえ。』

俺の名は佐藤 直哉どこにでもいそうな名前の高校2年だ。学校の成績は良くもな  
ければ悪くもなくてまあ、しいて言うなら中の下くらいの成績だ。ん？中の下つて事は  
バカの部類に入るんじやないか？まあ、そんなのは気にしない気にしない…………。

んで、運動神経はまあまあいい方だと思う。友達だつていっぱいいる。嘘、まあクラスの皆とは仲良くやれてる感じ? だとは思うその中でも特に仲がいい奴らはいるが……まあぼつちでは無いということだけは理解して欲しい。俺のやつてる部活は電気研究部だ。まあそれは上つ面だけの名で活動はトランプやつたりとかボドゲやつたりとかして遊んでるだけの部活だ。電気研究? なにそれ? 知らない。ゲーム研究の間違えでは? つと言いたいくらいだ。まあ俺の自己紹介はこんな所か……。

「クツソ! マジでクソ!! マジでうぜえはコイツ!! 敵になつたらお前集中的に狙いまくつて潰してやんかんな! 覚えとけよクソザコツ!!」つとまあいつもの調子で画面に向かつてガチで叫んでいたときにコンコン扉をノックする音がした……。「ん? 誰だ?」ガチャリとドアを開けると「よつ」つと挨拶してきた。「おつ、お前はだつ誰だ!」俺は頬に汗を垂らしながら問い合わせた。「我が名はかずま! お前の幼なじみにして目の前の家を拠点とする者!」ドカーン! と効果音がなりそくなくらいの迫力で厨二臭いポーズをとりながら言い放つた……。「うわ…… お前イタイナ……」「いつイタクねーよ!」つといつもの茶番は終え……。

あつ、こいつは伊達 かずま俺の幼なじみだ。決して佐藤では無いぞ? 俺が佐藤だ。間違えやすいかもな。まあ家が目の前だから昔から良く一緒に遊んでる。コイツの学校の成績は中の上か上の下くらい。運動神経はそこそこのいいとは思うんだが筋力

が……まあ気にするな。俺とコイツは別の学校で、友達情報はよくわからん。まあぼつちでは無いらしいから大丈夫だとは思うが……。コイツの部活はなんと演劇部だ！だから演技は超うまいぞ！！つと言うのは嘘で超うまいとは言えないな……。まあ下手では無い。コイツの紹介はこんな所か……。

「んで？今日は何用で？」つと俺が問いかけると「なんかやろうぜー」つと言つてきた。「なんだよお前。やること決まってないのに来たのかよ……。」なんなんだこいつは……。「まあ近所、というか目の前なんだし暇な時に来たつて良いじやないか」まあまあとか言いながら笑つて言つてきた。「まあまあじやねえよ。俺はゲームで忙しいんだよ。」ゲームをやらせてくれ。「そうか。じゃあ適当に見てるわ。」つと言いながら俺のゲーム画面をながめてくる。なんかずつと見られてるとやりずらいな……。「そんな見られてるとなんかやりずらいんだが……。」俺はため息混じりでそう言つた。すると……。「えー、だつて暇なんだもーん。今アプリもやりたいの無いしーお前がやつてるのも一人で出来ないしーだから見てるわー」いや、だから見られてるやりずらいんだつて！俺は思つたことは口に出さずめんどくさいから諦めることにした。「わーつたわーつたもう辞めるよ。」んで？結局なにやるん？やる事ないんだろう？」俺はそう言いながらps4の電源を落とした。「やる事無いよ？でもなんかやろうぜ！」かずまは気楽にそんな事を言つてきた……。「おい……。」こいつ本当になんな

んだよ…………。

「まあ、じゃあ出掛けるか。」俺は考えるのがめんどいからそんな簡単な案を出した。  
「おっ！じゃあアイツん家行くか！」ん？アイツん家？俺はそんな疑問を残しながら  
チヤリでかずまについて行くことにした…………。

「ここだ！」かずまは大きな声でとある家の方を指さした。そこにあつたのは階段を少  
し登つた所にある大きくもなければ小さくもない塗装は壁が茶色で屋根は黒色の家。  
「こつ、ここは!?」俺も声を大きく上げて言う。「そう！ここは脳筋が住みし拠点!!」か  
ずまは手を大きく広げ、ようこそ！つと言わんばかりに笑顔を向けてくる。「やはり、こ  
こは脳筋が住みし拠点か…………。」俺は喉をゴクリッと鳴らしゆつくりと階段を登つ  
て行く…………。すると、中からスパン！という音が聞こえてきた。俺とかずまは何  
事かと思い階段を駆け上がりドアの前で銃を構えアイコンタクトをした後…………  
『突撃いいいい!!』つと大声でドアを蹴破り…………つはしなかつたがドアに手を掛け  
勢いよく開けた。「どうした!!何があった!!」俺は銃を構え左右を警戒しながらリビン  
グへ突撃をはかつた、かずまも同様にリビングへ突撃。するとそこに居たのは、週刊誌  
に新聞紙を巻き壁に思いつきり投げつけていたある少年がいた…………。そう、そいつ  
こそがこの家に住んでいる脳筋である。

コイツの名前は黒鉄 勇吾。コイツは、まあ幼なじみだと思う。かずまほど付き合い

は長くないがな。

コイツはかずまとは違ひ同じ高校に通つてゐる。コイツの成績はまあ、いい方だと思う。上の中くらいだ。運動神経は俺といい勝負つてとこだな。友達はまあめつちやいるつて感じではないが、クラスの奴らとは半分くらいは友達? つて感じだと思う。まあ俺とコイツはクラスが同じだからぼつちでは無い。少なくとも俺はいる。えーと、ああ後は部活か。コイツは俺と同じ部活に入つてゐる。電気研究部とか言うのは上つ面だけのあの部活だ。

まあコイツの紹介はこんくらいでいいだろ。

「お前何やつてんだ……？」俺はちょっと引き気味にこの脳筋に問いかけた。「ん? なんだ直哉達か、今丁度Gを仕留めたところだ。」何事も無かつたかのように普通に会話してくる脳筋。そして手際よくGの死体を始末を始めた。「おい……。」かずまもだいぶ引き気味である。「ん? 何故お前達はちょっと引き気味なんだ?」つとクエスチョンマークを浮かべて呑気に話してくる脳筋。「いや、今のは流石に引くだろ……。」俺がそう言つても尚もクエスチョンマークが消えない脳筋。「ハア……。」コイツはもうダメだ……。」かずまはもう諦めモードである。「なんのこの脳筋……。」俺もかずまに続いて諦めた。

「それで? お前らは銃まで構えてどおした?」「「どおしたじやねえええ!!」」俺とかず

まは綺麗にハモつた。「お前なあ！俺達はお前ん家に来た時に中からすごい音が聞こえたから慌てて銃を構えて突撃して来たんだぞ!?」さつきから出てくる銃はお察しの通りもちろん只のエアガンである。「そうなのか?」「そ・う・な・ん・だ・よ！」何でこいつは昔からこんなに鈍感なんだろうか。ここまで行くともはや天才の域である。

「それで？本当に何しに来たんだ？」勇吾は俺達に問いかけてきた。「暇だつたからなんか適当に来た。」俺がそう言うと「は？」っと勇吾はちよつと戸惑つて問いかけてきた。「は？ん？やる事ないのに家に来たのか?」「うん。」俺とかずまはまたもやハモリ勇吾は大きなため息をついた。「ハア……。やる事ないのに来るとかなんなんだよお前ら……。」確かに勇吾の気持ちはすごくわかる。俺もかずまがいきなり来た時はこうなつた……。「えー、いいじやんかー。どうせお前も暇だろ?」「いや、確かに暇だが……」腕を組みながら返してくる。「だろ？なら皆でなんかしようぜ？」…………皆で黙り込みしばしの時間が経過し俺は結論を言つた、いや結論でもなんでもねえ。ただ思つたことを口にしただけなんだが……『『『やることが決まらねえ。』』俺達3人が放つた言葉は綺麗にハモつた。

え？・2話目からこんな調子で大丈夫なのか？

ミーンミンミンミンミン。

「あちー……。」俺は勇吾ん家のリビングで横になつていた……。

「それなー」かずまも同様、俺の隣で横になつてている。

「んで？ 結局何するよー…………。」勇吾は小声であちー……。と言いながらTシャツの胸の辺りを掴みパタパタしながら言つてくる。

「それなー。ほんと何しようかー」そう、相変わらず何をするのかが決まってないのである…………。

バツ！かずまは勢いよく立ち上がり「じゃあ皆でサバゲやろう!!」つと提案した。

「サバゲかー…………。」勇吾はそう言いながら窓の外を眺めた。

なぜ勇吾が窓の外を眺めたかというと、勇吾の家の裏にはすぐそこに山があり、その山までの距離は歩いて3分くらいで着ける程度の距離だ。

そしてその前には少し大きめの庭がある。

俺達は中3の夏休みを使い、その庭の大きさくらいのサバゲフィールドを作つたのである。

そう、”自作の”サバゲフィールドだ。

皆で金を少しづつ出し合い作り上げた俺達専用のサバゲフィールドだ。そのフィールドでは定期的に試合をするのである。

いつもは他の友達も呼び、TDM（チームデスマッチ）や、FFA（FREE-FOR-ALL）、フラッグ戦などをしている。

フィールドは狭いからTDMって言つても4対4とか3対3とかだぞ？ww  
まあ、そんな事をしている。

「しかも今日は3人だぞ？やつたらめっちゃ広く感じるんじやないか？」  
かずまは俺と勇吾に笑いながら問いかけてくる。

「だなう。今日俺達3人だからめちゃくちゃ広く感じるんじやないか？」

勇吾もそうだな。つという感じでかずまの案に乗つかつてくる。

「よし！じゃあ久々にサバゲやるか!!しかも3人なんてマジで広そうだな！」

俺も笑いながらその案に乗つかつた。

そして皆サバゲの支度を終え……。つていうか支度つつつても何もそんなに変わつてないんだがww

ここで俺達の装備を紹介しよう！！

まずは俺！

俺の装備は！…………って言つても俺はハンドガンを二丁持つてるので後は何も  
変えてないんだがww

因みに俺の愛銃はデザートトイーグルのブラツクとシルバーだぜ！

戦闘スタイルはハンドガンを二丁構えて敵の弾を身軽に避ける、機動力重視のダンシ  
ングスタジールッ！！

かずまの装備は俺と一緒にハンドガンを二丁持つただけで後は変わらないww

愛銃はPCC356のブラツク。

戦闘スタイルはハンドガンを一丁構え、障害物に隠れて進む、ポリススタジールッ！！  
勇吾…………脳筋の装備は半袖半ズボンでアサルトライフルを二丁持つてい  
る…………。

ヤバイ。バケモノ…………。

愛銃はSCAR-Lのフラット・ダークアースとブラツクだ。

戦闘スタイルは”アサルトライフル”を”二丁”構え、障害物から”全身”を勢いよ  
く出し乱射する、フルバーストスタジールッ！！  
流石脳筋…………。勝てる気しねえ…………。  
そうして皆がフィールドへ行き、

10 え？ 2話目からこんな調子で大丈夫なのか？

「さあー ゲームをはじめよう！」

俺がいつも通りの合図を出すと……

「盟約に誓つて！ 《アッセンテ！》」「

いつも通りの返事を返してくれた……。

すると同時……

「死ねえい！！」

脳筋が飛び出してきた。

「クツ！」 俺はその弾を身軽にかわし、思いつきり突撃する。

「ハハハハ！ 当たらなければどうということはない！」

だが、だんだん距離が近づくにつれ……。

「クツ！ なんて弾幕だ！ これじゃこれ以上進めない！！」  
さすがにこの数は…… !!

「ハハハハ！ どうしたさつきまでの威勢はどういったた！」

そうやつて脳筋は高笑いしていると……。  
ズドンッ！

「えつ？」

脳筋は戸惑い、何があつたのか全く理解出来ていなかつた。

「ハハハハ！動きが止まつてればそりやあいい的さ！」

そう、脳筋の頭をブチ抜いた（B.B.弾だよ？W.W.）のはポリススタイルのかずまだつた……。

「なつ、なんだと？さつきまでずつと気配を消していいたというのか？」

「いや？全く消してなかつたけど？」

「え？」

「ただお前が直哉だけを狙つてつつ立つてたから後ろからブチ抜いただけだが？」

勇吾は何も言えずそのまま呆然と立ち尽くしていた……。

「さあ、これで1体1、タイマンだな直哉よ。」

立ち尽くしている勇吾の事は気にせずそのまま試合を続ける。

「フツ。やはりお前が残ると思つてたよかずまよ。」

すゞい因縁があるような雰囲気を漂わせている……。

そして、タイマンと言つたらこれしかないだろ。つと言わんばかりに俺とかずまは何

も言わずにマガジンを捨て、俺は持つていた二丁目の銃も捨てた。

「それじやあこれで決着だな。」

「ああ、そうだな。」

2人は銃をおろし、俺は一枚のコインを取り出した。

「コイツが落ちたと同時に撃て。早撃ちだ。それでいいよな?」

「ああ、俺は構わない。」

かずまの意思を確認し、俺はコインを親指ではじいた。

チヤリン。

ズドンッ!

俺が上手く石にコインを当て綺麗な音を出した後、大きな銃声が後ろの山で反響し鳴り響いた…………。つと言いたいところだが、エアガンがそんな銃声を出せるはずが無く…………。

ポシュンッ! つという地味な音が鳴った…………。  
「フツ。やるなかずま、流石だ。」

「直哉もな。」

2人は同時に倒れ込んだ。

「痛い! 痛い痛い痛いッ!!」

「あああああ!! 頭が頭がああああ!!」

そう、2人は同時に悶えていた…………。

「何やってんだ…………。」

勇吾はイタイひとを見るような目で俺達を眺めていた……。  
こうして高校生達はとりあえずこの日はサバゲをして、暇を潰したのであつた……。

よし、あいつの家に行こう。

ピンポーンピンポンピンポーン。ピンポピンポピンポピンポピンボーン。  
ドンドンドンドンツ！ガチャツ!!

「うるせーなつ!!」

大声を張り上げ勢いよく出てきたのは俺の目の前の家に住む。

伊達　かずまであつた……。

「おー、かずー。やつと出てきたかー」

俺は何も無かつたかのような顔でよつ。つと言わんばかりに手を軽く上に上げた。

「やつと出てきたかーじやねえよ！何であんなにピンポン押す必要があつたの!?そして何でお前は何も無かつたかのような顔をしてるの!?」

かずまは相変わらずの大声で俺に言つてきた。

「だつて1回押しても出てこないからさー」

「な・に・が！1回押しても何だよ！お前俺ん家のピンポン何回押したの!?ねえ！ねえ!?それとも何か!?お前はあんだけ押したのにあれでピンポンが1回だと思ってるの!?」

かずまは額や頬に汗を垂らし、その汗を大声を張り上げると共に激しく飛び散らして

いる。

「汗飛ばしすぎだぞ。」

俺はそんな大声にも動じず、落ち着いて話しかける。

「お前のせいだからな!?」

「んで今日は何する?」

「おい!」

俺はかずまの言つた言葉をスルーして話を切り替えた。。。

暇!

チヤリを走らせついた場所は。。。

昨日と同様。脳筋。。。。。じやなかつた。勇吾の家である。

ピンポーン

今回は1回のみ。

ガチャ。

「何だまたお前らか。」

誰だろう?という顔で出てきた勇吾だが、俺達を見た瞬間、

「ア……。少し小さなため息をついた。  
「今日は何しに来たんだ？」

勇吾は何しに来たかを俺達に問い合わせた。  
それに対して俺達はいつも通りの感じで、  
「何か。」と答えた。

「ここは勇吾ん家のリビング。昨日と同様、ここで何をするか話し合っている……。  
そう。勇吾ん家のリビングは俺達の溜まり場なのである。

「よし！じやあ今日はあいつの家に行こう！」

「あいつの家？」

「そう。あいつの家。」

俺はあいつの家としか言わずに、かずま達と一緒に勇吾の家を出た。

今回は俺が先頭になつていて、かずま達に付いてきてもらつている感じだ。

「着いたぞ。」

俺はある家の前でチャリを止め2人に着いたということを知らせる。

「ここか……。」

勇吾がその家を見て小さな声でつぶやいた。

かずまも「ここか……。」と勇吾と同じことをつぶやいている。

壁が白く屋根は黒。前から見ると右にリビングの大きな窓があり、その前には駐車場がある。そこに赤い車が止まっている。

左側に玄関があり、ドアの色は茶色だ。  
ピンポーン。

俺がインターフォンを1回押してある人が出てくるのを待っている。  
しばらくして、ガチャリ。とドアが開いた。

「どちら様でしようか？……」

その人は少し恥ずかし気味に開いたドアから顔だけを覗かせこちらを見ている。

「よつ。」

「おお……。何だ直哉達か。まあ、入つてどうぞ。」

「おう。」

俺達は返事をしながら家の中へと入つていった……。

ドアを開け玄関に入ると右には靴箱、左には大きな絵画が飾られている。

そして、家に入つてからすぐに階段がありその階段には人が歩くと自動でつくランプがある。

2階に着いたらすぐ右に部屋が3部屋くらいあり、真ん中の部屋が俺の友達の部屋だ。

「それで？久々に俺の家に来たけど何しに来たの？」

あつ、こいつの名前は皇 『すめらぎ』 大輝こいつも俺の幼なじみだ。

成績は上の中くらいだと思う。

運動神経は………… そんなには良くはない、けど悪くもない。強いて言うなら少し悪いくらいだな…………。

そして、大輝もかずまと同様学校は別である。

だから友達情報は詳しくはわからんが、言いづらいんだが…………。

『ぼつちだ。』

でつ、でも学校ではだぞ！学校以外だつたらかずまとか勇吾とか俺とか誰かしらは友達いるからな！そこは間違えるなよ！

”学校では” ぼつちなだけだぞ！

あと、大輝は皆からは大概『提督』つと呼ばれている。

なぜかと言うと、そりやあねえ？【艦これ】をめちゃくちゃやり込んでるガチ勢だか

らだ。

まあ、大輝の紹介はこんな所だな。

「「何かしに来た。」」

俺達はほぼ同時に同じことを言つた。

「え？」

そしていつも通り相手の、は？みたいな疑問が俺達に返つてきた。

それと、大輝………… 提督はまだうまく理解出来てないのかもう一度問い合わせてくれる。

「今なんて言つた？」

「だから”何か”しに來た。」

俺はもう一度提督に言つてやつた。

「え？」

提督の2度目のえ？が返つてきた。

やつぱりいきなり来て、何かしに來た。は理解出来ないよな…………。

俺はかずまが家に來た時を思い出し、そりやな…………。つという表情で提督を見ながら問いかける。

「いきなりきて驚いただろうけど、まあ、なんかしようぜ?」  
「なんかって……。」

提督はまだクエスチョンマークが消えていない。

まあ、何かすればこのクエスチョンマークも消えるだろ。  
「んで? ホントに何するんだ?」

勇吾が皆に問いかける。

「なにするか?……」

「ん?……」

俺とかずまが唸る。

「よし! ジやあトランプやろう!」

俺は、暇ならトランプやろう! 定番だろ? つと言ふように皆に案を出す。  
すると……。

「トランプか?」

「トランプね?」

「トランプ……。」

皆は少し乗り気じや無いのか、口に出しながら考え出す。  
「トランプおもろいじゃんか! やろうぜ! なつ、なつ!」

俺は両手を広げながら皆にもう一度トランプをやろう。つというようにもう一度トランプをやろう。つというようにもう一度トランプをやろう。

「まあ、直哉がそこまで言うならトランプやるか……。」

「だなう。」

「しようがない。」つと各々結論を出し、トランプをやる！という案に乗つかってくれた……。

「んで？トランプで何やるよ？」

「じゃあまずは適当にババ抜きでもやるか。」

「ババ抜きか、よしいいだろう。」

「うん。」

「いいんじやない？」

皆の同意を得たところで俺達はババ抜きをする事になった。

だが、適当に始めたババ抜きがあんなことにならうとは……。

暇！

俺達はババ抜きを黙々と進めていた……。

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「・・・・・」

「よし！やつと揃つたー！あゝがり！」

「うわクツソ！」

黙々とやつていたババ抜きを1番であがつたのは、

そう、かずまだつた……。

「お前なんでこういう時だけ運が良いんだよ。ガチャ運ないくせに。」

「うつ、うるせーな！」

かずまはガチャ運はないのに毎回こういう時だけはホントに運がいい。

ホントなんなんだこいつ…………。

「後は俺と、勇吾と、提督か。よし、じゃあ続きやろう。」

かずまがあがつたことにより止まつていたババ抜きが再開される。

さつきまでは、かずま→俺→勇吾→提督の順でトランプを引いてたんだが、かずまが抜けたから俺→勇吾→提督の順に変わった。

「ど～れひつくかな～」

俺はどれを引くかと勇吾の持っているトランプの上で手を動かしながら言う。

「早くしてくれ。」

勇吾はハア……。つとため息混じりに言つてくる。

「はーいはいわかつたつてー」

おりやつと選んだトランプを引き、何かなう。という感じで引いたトランプを見る。すると……。

o h……

そこにあつたのは『ジョーカー』だつた。

はあ?! ヤベー『ジョーカー』引いやつたよ! 勇吾が持つてたのかよクソッ!  
ツ!!!

「提督引かせてくれ~」

「おう。」

勇吾は少しニヤケながら提督のトランプを引いていく。

俺は危うく声を出しそうになつたが、何とかこらえてポーカーフェイス。ポーカーフェイス。と自分に言い聞かせる。すると俺の番がやつてきた。

「ほら。引いてー。」

提督に早く。と言わんばかりに急かされて俺は適当に引く。  
すると……

「はい！あがり！」

「え？」

俺は考え方をしてて枚数も見ないで適当に引いたから提督の残り枚数が1枚だと気づかなかつたのだ。

「ええええ！提督あがり！？うわマジか！」

勇吾も提督のあがりと言う言葉を聞いて驚いていた。

「やつた。これで勇吾と直哉だね。」

提督はハハハッと笑いながらそんな事を言つてくる。

「そうだな。……」

勇吾もマジかーという感じでつぶやいた。

「ん？俺がババ持つてないつていうことは……。」

どうやら勇吾は気づいたらしい。

俺がババを持つていることに！

「そういう事だ。」

俺はニヤリと笑いながら勇吾に言う。

俺と勇吾の手持ちは、俺が3枚、勇吾が2枚だ。

俺がババを持っている。

「さあ、再開しようか。」

俺が言うと。

「あー、しようがない。再開するかー……。」

そう言い合つて再開したのだが、ここからが長かつた。

「あークソ！またババ引いた！」

「危ねえ。」

そう、かれこれ20分くらい2人ともババを引き合い決着がなかなかつかないのだ。

「まだ決まんねーのかー？」

「ほんとね。」

一抜けしたかずまと二抜けの提督が疲れた。と言いたそうにずっと俺と勇吾の試合を見ていた。

「あーまた！」

「ぬあああ！またか！」

そうやつて決着がつかないままどんどん時間が進み、かずまと提督はもう寝ていた。

「うお！よつしやああああ！！やつとあがれたあああ！」

そう、大声を張り上げたのは勇吾だった。

「クツソ!!」

そしてかずまと提督が抜けてから約40分くらいかかった長き戦いは終わつたので  
あつた。……

# 最終奥義!!

ブウン・・・・・

小さな道だが、道路には車がよく通つていてその道路の脇にある家に俺達はいた。  
「じゃあ、◆?7出した人からスタートな〜」

「あいよ〜」

「わかつた」

「OK」

俺達は今七並べをやつてている。

七並べは久しぶりだな・・・・俺はそんな事を考えながら床に片足を立てて座る。

今は皆でちやぶ台を囲うような形であぐらをかいたり、正座したりと皆がやりやすい  
体勢で座り込んでいる。

「おつ、◆?7だ。じゃあ俺からな〜」

◆?7を出しながら顔が少しここへくる。

「う〜ん。じゃあこれ」

俺は◆?8を出す。

今の俺の手札は♦？が結構あるため、好きな時に出しやすいし止めやすい。

「おう。♦？8か、なら俺はこれ」

勇吾は♦？9を出す。俺は♦？9、J、Q以外は♦？が全て揃っているという神引きである。

「じゃあ俺はこれで。」

そう言つて出したのはかずまだ。かずまは♦？6を出す。

「俺はこれ。」

次は提督が出る。提督は♦？6を出した……

俺は『JOKER』と♦？Kと♦？Aを持つている。

今の状況は提督とかずまが上がり、”また”俺と勇吾が残っていた。

「なんつで！毎回俺と直哉が残るんだよ！！」

勇吾は大きな声で喚……失礼。叫んだ。

「知らねーよ！俺だつて残りたくて残つてるわけじゃねーよ！！」

俺も勇吾と同様叫んでいた。

そして勇吾のターン。

「じゃあ、俺はこれだ！」

勇吾はそう言いながら♦?Jを出す。

そして俺のターン。

俺はもつていたトランプを見て、”『JOKER』”と”♦?K”ではなく”♦?A”を出した。

勇吾のターン。

「じゃあ俺は”バス”だ。」

ん?と俺は疑問に思つたが、そこまで気にはしなかつた。

そしてまたまた俺のターン。

「残念だつたな!俺はこれで上がりだ!」

俺はハハハ!と高笑いしながら手に持つていた『JOKER』と♦?Kを同時に出す。  
だが・・・

「あれ?待てよ?置け無くね?」

俺は大きな見間違いをしてたようだ。今出ている♦?は

♦?A、2、3、4、5、6、7、8、9、10、Jだ。

そして、今出でないのが♦?Qと♦?K。

そうすると勇吾が今持つてているのは♦?Qということになる。

つまり、もう『JOKER』の”使い道が無い”。という事だ

「つてことは・・・・」

「そうだよ！俺の上がりは確定だ！『JOKER』を温存し過ぎたな!!」

勇吾は高らかにいや、勝ち誇った様にハハハハハ！大きな声で笑う。

「クソがあああ！！」

俺は発狂気味に叫び最終手段に出る。

「こうなつたらもう最終奥義しかないな。」

「最終奥義？」

俺が言うと勇吾は疑問符を浮べて俺を見る。

「そう！これが俺の最終奥義！」

『石破！天驚拳!!』

という名の台パンである。

「コイツ本当に台パンしやがった！」

「ハハハ！台パン？知らんな！これは俺の奥義！石破天驚拳だ!!」

直哉は大きな声で笑いながら、とても楽しそうにそう言つたのだつた・・・・・・